

牛糞便集卵検査法における渡辺法と２段階沈殿法の比較

丹後家畜保健衛生所

○田中義信

【はじめに】 丹後管内では2019年度の糞便検査49頭のうち双口吸虫卵5頭、*Buxtonella sulcata*シスト4頭、ベネデン条虫3頭は糞便集卵法で検出された。かつてはこれらの寄生虫に重度寄生される牛が散見されてきたが、近年では管内において軽度消瘦、不受胎、慢性軟便、発育不足など生産性を低下された軽度寄生牛がみられる。これらの寄生虫による生産性阻害防止のため、軽微な寄生でも検出し駆虫する必要がある。そのためには感度の高い糞便検査方法が求められる。そこで糞便集卵法の沈殿法における検査の検出感度の向上を目的として黒毛和種繁殖雌牛の直腸より採取した糞便14検体について従来の渡辺法と２段階沈殿法（2step法）で比較検討した。【方法】 渡辺法では糞便5g、濾液は15分静置し定法に従い実施し全視野を鏡検した。2step法は糞便2gを金網メッシュと水道水250mlで濾し、15分静置後、濾液の沈殿部を残し、上液を捨て、沈殿容器を傾け喫水部をスポイトで吸い取り、さらにスポイト内で5分静置後、スライドガラスに沈殿液約100 μ lと水約100 μ lを滴下しカバーガラスをかけ鏡検した。糞便から双口吸虫卵9検体及び*Buxtonella*シスト1検体が検出された。1検体のみ双口吸虫卵が2step法で検出されるが、渡辺法では検出されなかった。双口吸虫卵のEPG検出感度を比較したところ、2step法は渡辺法の 11.4 ± 2.7 倍（平均±標準誤差）であった。【考察】 以上のことから2step法はEPG検出感度が高く、有効な検査方法であると考えられる。